

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 『馬伯樂』論

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 蕭紅, 『馬伯樂』, 抗日戦争, 国民性 キーワード (En): 作成者: 山本, 和子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	<a href="https://doi.org/10.18956/00006144">https://doi.org/10.18956/00006144</a>

## 『馬伯楽』論

山本和子

### 要旨

蕭紅が遺した長編小説『馬伯楽』は、1937年7月7日に勃発した日中戦争下の混乱した社会状況を背景に、主人公が青島から上海、上海から武漢へと避難する過程が描かれている。主人公の馬伯楽は青島の資産家の息子で、すでに妻と三人の子供がいるが、定職に就かず父親の家で気ままに暮らしている。小心者で一家の主としての気概も能力もない。父親や妻を守銭奴だと批判しながら、父親の経済力に依存して生きている無責任で身勝手な人物である。日中戦争さなか、民族統一戦線が叫ばれ、文芸界においても人民の戦闘意欲を高揚させる作品が求められた時代に、蕭紅は時代の潮流に挑むかのように、馬伯楽のような否定さるべき人物を描いた。蕭紅は馬伯楽の形象を通して、「人間的に不誠実ないい加減さ」を浮き彫りにし、国民性における問題点の所在を明らかにしようとしたのである。

キーワード：蕭紅、『馬伯楽』、抗日戦争、国民性

### はじめに

蕭紅はその短い生涯の晩年、二年間を香港で過ごした。その間、病と闘いながらの彼女の仕事ぶりには目を見張るものがある。彼女が遺した二篇の長編小説、『呼蘭河伝』と『馬伯楽』はいずれもその大半が香港で書かれた。この二篇は、ほぼ同時期の作品であるが、その題材と趣は大きく異なる。

『呼蘭河伝』は、1937年武漢滞在中に書き始められ、1940年12月20日に脱稿した。東北の美しくも厳しい自然と、そこで練り広げられる残酷で哀しい人間の営みが、律動感溢れる文体で鮮やかに描き出された傑作である。それは、作家の脳裏に鮮烈に焼き付いていた故郷の光景が、二十年の歳月を経て再現されたものであり、故郷の愚かな人々に抱いていた憤りとか憎しみといった生々しい感情は、二十年という歳月によって、濾過され鎮静化されて、全体が悠然とした冷静さと哀れみの情に包まれている。

一方の『馬伯楽』は、1937年前後の青島、上海、武漢を舞台に、抗日戦争期という、まさに作者自身の生きているその時代が描かれている。主人公の馬伯楽は青島の資産家の息子で、中学を卒業したのち、定職に就かず父親の家で気ままに暮らしている。年は三十に近くすでに妻

と三人の子供がいるが、小心者で一家の主としての気概も能力もない。父親や妻を守銭奴だと批判するが、彼自身、父親の経済力に依存して生きているのである。

作者が『馬伯楽』の主人公として選んだ馬伯楽は、たくましく生きる理想的人物でもなく、また、社会の底辺でどうしようもない運命に翻弄され、哀切の情を禁じ得ないといった人物でもない。蕭紅は、なぜこのような人物を描こうとしたのか、この作品を通して何を訴えようとしたのか、探してみたい。

—

蕭紅は、1932年、宿代が払えず人質として軟禁されていた旅館から、作家の蕭軍によって救出された。以来、二人は人生のパートナーとして共に貧困と闘い、日本の侵略による弾圧と闘い、上海まで流亡してきた。しかし、生活が安定するに従って二人の間に亀裂が生じ始める。

蕭軍との生活に精神的に疲れ果てた蕭紅は、美術学校の学生となって学生寮に入ってみたり、日本に渡航したり、その後も北京に出かけたりと、蕭軍と離れて暮らすことを試みる。蕭軍もまた、蕭紅が素晴らしい女性であると認めながら「彼女は妻ではない、とりわけ私の妻ではない」と悟っている。<sup>1)</sup> 結局、二人は1938年4月、西安で別れることになる。この訣別について、川俣優は「単なる感情的な対立から生じたものではない。いかにして抗日活動に関わっていくべきかという課題をめぐる、二人の間に考え方の相違が生じ、それが揺らぎつつあった二人の生活を破綻に導いたものである。蕭軍は延安の共産党根拠地へ向かおうと考えたが、蕭紅はそれを受け入れることができなかった」<sup>2)</sup> という。

蕭軍自身、当時を回想して「私は学生たちといっしょに抗日戦争の遊撃戦を戦いに行きたかったのだが、彼女は私に作家であり続けることを望んだ。しかし、あのとき、私はすでに作家としての気持ちを失っていた。すでにペンに対して興味を失っていた。銃を持って戦いたかったのだ」<sup>3)</sup> と、二人の考え方の不一致を記している。抗日によって絆を深めた二人だが、その抗日が二人の絆を断ち切る一因にもなったのである。

蕭紅はその後、端木蕻良との結婚生活に入る。この端木との結婚も、当初から波瀾含みであったようだが、ともかく二人は武漢から重慶へと日本軍の侵攻からの避難を続け、1940年1月、香港に至る。彼女が香港へ避難したことについては、当時は無論のこと1980年代まで、抗日戦線から離脱したとか、自己の小さな世界に蟄居したとか、あまり肯定的な捉え方をされてこなかった。こうした見方に対して、艾曉明は、「蕭紅は進んで自分の果たすべき役割を選んで、一人の戦争に入った。一人で、人類の精神における愚昧や卑劣に対して戦いを挑んだ」<sup>4)</sup> と、むしろ「闘いの姿勢」を見て取る。

執筆に専念できる環境を求めて香港に逃れたものの、蕭紅の身体はすでに結核に蝕まれ、か

なり衰弱していた。咳と頭痛と不眠に悩まされ、数日書いて数日寝込んでいたという。<sup>5)</sup> それにもかかわらず、彼女は精力的に創作に励み、『后花園』『小城三月』など叙情性豊かな短編小説や、数編の散文、それに二篇の長編小説『呼蘭河伝』と『馬伯樂』を書き上げる。

この『馬伯樂』を書く前に、蕭紅はその前作ともいえる短編小説を発表している。1939年1月『文摘』に掲載された『逃難』である。『逃難』の主人公は『馬伯樂』の主人公の原型といえる人物で、口では勇ましいことを言いながら、本当は戦々兢兢としている臆病者である。彼は、日本軍の侵攻が迫るなか、あくまでも踏み止まって「抗日」を行うべきで、逃げ出すのは怪しからんと口では言う。本当は、一刻も早く逃げ出したいとたまらないのに、戦闘的であることを装うのに懸命なのだ。結局、彼はこっそり避難しようと、妻子を連れて駅までやって来る。しかし、駅には避難民があふれ、列車に乗るのは至難の技だ。主人公一家は、混雑する駅で家族がばらばらになったり、揉み合ううちに荷物だけがひとりでに列車に送り込まれて運び去られたりと、さんざんな目に遭いながら、這々の体で西安に辿り着く。

中国では抗日戦争が始まる前から列強の侵略や内乱が相次ぎ、人々はしばしば避難を余儀なくされていた。駅や列車はいつも大きな荷物を抱えた人々で混雑し、列車が駅に到着すると車両の入口は押すな押すなの大混乱となった。そうした状況を、葉聖陶はすでに1924年に『潘先生在難中』で、ありありと描き出している。

『逃難』を書き上げた後、蕭紅は『馬伯樂』の構想にかかり、1940年春、執筆にかかる。物語は第一部と第二部から成り、第一部は蕭紅自身が表紙をデザインして、1941年1月、大時代出版社より単行本として出版された。第二部は1941年2月から11月まで『時代批評』に十五回にわたって連載され、「第九章完、全文未完」で終わっている。

当時『時代批評』の編集に携わっていた袁大頓が、未完に終わった経緯をこう記している。

41年11月『馬伯樂』の原稿のストックがなくなった、続きはどうする？ と訪ねたとき、彼女〔蕭紅〕はぼんやりとして言った。

「大頓、私はもう書けない。誌上に私が病気になったと書けばいいわ。とても残念。あの悲しい馬伯樂に、明るい結末をつけてやれなくて」<sup>6)</sup>

冉小平は「蕭紅は続編で、馬伯樂の覚醒と新生を描くつもりであったようだ」<sup>7)</sup>と、作者の意図を推測する。さて、続編はどのように展開したであろうか？ そのことを考えるとき、注目したい二編の散文がある。いずれも1939年重慶に避難しているときのもので、『長安寺』と『放火者』である。

『長安寺』は寺の境内の夕暮れ時の情景を淡々とスケッチしたものである。ゆったりと流れる時間のなかで、来る日も来る日も繰り返されるであろう庶民のなにげない日常の一コマを描

き出したあと、最後に、作者は、ここが爆撃を受けたら、と想像して戦慄を覚える。永遠に続くかのように思われる人々の日常の営みが一瞬に断ち切られてしまうという不条理が、鮮やかに浮かび上がるのである。

『放火者』は1939年5月3日と4日に爆撃された重慶の市街地を描写したものである。爆撃に遭い瓦礫の山と化した街。まだそこここにくすぶり続ける煙。奪われた無数の命。それは戦闘員の命ではない。平凡に暮らす庶民、年寄りであり母であり幼子の命だ、と作者は訴える。

『馬伯楽』の続編では、馬伯楽の覚醒とともに、重慶の惨状を描いて、戦闘員ではない庶民が犠牲者となる戦争の不条理を浮き彫りにしたかったのではないか、そして、それは、蕭紅独特の手法によって、読者の心を揺さぶるような、壮大な反戦文学となったのではないか、と想像される。

## 二

『馬伯楽』は未完ではあるが、第一部と第二部それぞれが、時間的空間的にまとまりを持った構成となっている。第一部の前半は、盧溝橋事件発生以前の青島を舞台に、主人公馬伯楽と彼の家庭環境が描き出される。後半は、盧溝橋事件発生後の上海が舞台となる。単身上海に逃げ出した馬伯楽は、穴蔵のような家で耐乏生活をしながら、ひたすら妻が金を持って来るのを待つ。そして、三人の子供を連れて青島から出て来た妻と、武漢へ避難することで落ち着する。

第二部、前半の四章では、混雑する列車と船を乗り継いで上海から南京、南京から武漢へと避難する行程が、後半の五章では、武漢を舞台に、彼の恋愛と失恋の顛末を中心に描かれる。そして、次の避難地重慶に逃れようとしているところで物語は終わっている。

1937年7月7日、盧溝橋事件を契機に勃発した日中戦争は次第に戦域を拡大し、8月13日には上海も爆撃される。いわゆる「八一三」である。

主人公馬伯楽が上海から武漢に避難したのは「八一三」の約二ヶ月後という設定であるが、それは蕭紅が蕭軍とともに上海を離れた時期（1937年9月28日）とほぼ一致する。作品には、作者が避難する間に遭遇したと思われる情景描写が随所に見られ、当時の状況を彷彿させるのみならず、作者自身の切実な思いがひしひしと伝わってくる。なかでも、淞江橋の場面は圧巻である。

「八一三」後、ほどなく日本軍の爆撃によって、淞江橋が破壊されてしまった。上海から南京に行くには、淞江橋で一旦列車を降りて徒歩で渡らなければならない。昼間は日本軍による爆撃の恐れがあるので、列車は夜、上海駅を出発し、夜中に淞江橋に着く。暗闇のなかを一人一人が通れるほどの橋板の上を群衆が我先に渡ろうとする。だから、毎晩、橋を渡る人々の叫び声や泣き声が、「あたかも無数の人間が一つの楽器を奏でているかのよう」に響き渡った。

その泣き声と叫び声は天地を揺るがす。あたかも人々は死ぬか生きるかの瀬戸際に立たされたかのようだ。先を争える者は先を争い、先を争えないものは遅れる。狂った牛や馬のように強壯な者は、自ずと前を駆け、老弱婦女は、自ずと河に押し落とされる。なぜなら、年老いて弱い者、あるいはめめそしている女子供は動作がのろく歩くのが遅いからだ。こうした弱者は、自分がのろいことは別に構わないが、問題なのは健康な人たちの邪魔をしてしまって、優秀な人たちを風の如く前に進ませないことなのだ。ただ前に進ませないというだけのことだけど、優秀な人たちは、前に押しのけていくしか仕方がない。

そこで、強壯な男は風のように押しのけて行き、老弱者や子供は抵抗するすべもなく、ばらばらと河の中に押し落とされてしまう。

優勝劣敗の哲学は、涇江橋に来ると、誤りでないことが十分に証明でき、完全に具体化できるのだ。<sup>8)</sup>

戦争という非常時において最も厳しい状況に追い込まれるのは弱者である。社会においても家庭においても女として常に弱い立場にあった蕭紅は、優勝劣敗の現象に非常に敏感であった。

艾晓明は、「蕭紅は紛れもなく、女性として弱者として、戦争という暴力の下で受けた自らの辛い体験を作品に融合させた。(中略)彼女の弱者としての立場が、逆に強者たちを可視化した。例えば、尊敬されている男性作家たちには見えなくて表現しなかったもの、民族の生活の中でずっと存在してきた卑劣な人格や私欲や虚偽といったものを可視化したのである。これらは、戦争の危機によって減少するどころか、逆にこの危機ゆえにより直接的に一般の人々の日常生活を脅かしたのだ」<sup>9)</sup>と論じている。

1930年、19歳の蕭紅は父の決めた縁談を嫌って家出し、北京で、学生の陸振舜と同棲しながら北京女子師範大学附属中学に通う。しかし、蕭紅の父親の要請を受けて、陸の親が仕送りを絶ったので生活できなくなり、家に舞い戻らざるを得なくなった。さらに、1932年、婚約者王恩甲に旅館に連れ込まれたときも、親に金をもらってくるからといって、置き去りにされた。親の金に依存して生きる男に二度までもひどい目に遭わされたのである。その手痛い経験は、彼女に、自分を窮地に陥れた無責任な男の正体をはっきり知らしめたであろう。ただ男であるというだけで女の上に位置し、尊大に振る舞う男たちが、女に劣らず、否、むしろ女より卑小で怯懦であることを、彼女は思い知ったに違いない。

『馬伯樂』では、そのような卑小で怯懦な男を主人公にして、「人物の可笑しくて卑しい性癖と細部を拡大し、皮肉に満ちた議論を加えてマジックミラーのように変形させ」、<sup>10)</sup> そうして数々の欠点を暴き出した。その容赦のない筆致は攻撃的でさえある。

平石淑子は『馬伯樂』の特徴の一つに「登場人物に作者の同情や共感が反映されていない」<sup>11)</sup>

点を挙げる。また、尾坂徳司は「滑稽な文章なのに、読み進むうちに笑えなくなってくる。(中略) 蕭紅の『馬伯楽』は彼女自身をも含めた知識人の内部告発だから後味が悪いのである」<sup>12)</sup>と評している。

抗日の気運が高まるなかで、「抗日」「愛国」「正義」といった大義名分を振り回している男たちが、実は保身を図るのに汲汲としていることを、誰もが逆らえない立派な言葉に潜む欺瞞を、蕭紅は見逃さなかった。そして、その欺瞞を暴くのが自らの使命であると考えたのである。その妥協を許さない強い思いが、十分に鎮静化されることなくストレートに作品に反映され、それが、「同情や共感が反映されていない」或いは「後味が悪い」と評される要因となっているように思われる。

蕭紅は雑誌『七月』の座談会(1938年4月29日)で、「作家は一つの階級に属するものではなく、人類に属するものだ。現在或いは過去において、作家たちの創作の出発点は人類の愚昧に向き合うことなのだ」と発言している。<sup>13)</sup> 蕭紅は、まさしく『馬伯楽』において、人類の愚昧、とりわけ当時のいわゆる知識人の愚昧に正面から向き合い、彼らの「馬々虎々」(いい加減)な生き方と、その心理を徹底的に明らかにしようとしたのである。

### 三

作品の背景となった大状況として中国の近代化と日中戦争がある。その混乱期に、主人公馬伯楽は故郷青島から上海、上海から武漢へ「逃げる」。まずは自分を疎外する家から、後には迫り来る爆撃から。その「逃げる」馬伯楽と、戦時下の混乱した社会の現実が、喜劇的タッチで風刺画のように描き出される。

「何事も後退するゆとりを残しておかなければならない」。これが馬伯楽の哲学である。後退とは逃げることであり、形勢がよくないと見て取ると、彼は先ず逃げる。

彼は中学を卒業して、上海の大学を受験したが、失敗して聴講生となった。しかし、父親が仕送りをしてくれないため家に帰り、その後、定職に就かず、勝手気ままに日々を過ごしている。父親の経済力に依存して、生活に困ることはなかった。

馬伯楽一家が住む青島は、1898年にドイツの租借地となって以来、帝国主義による政治的、経済的、文化的侵略を受けてきた地域で、有力者たちは保身の意味もあって、ほとんどがキリスト教に入信したという。<sup>14)</sup> 馬伯楽の父親も一代で財を成した資産家で、やはりキリスト教に入信した。外見は生粋の中国の老人であるが、精神はすっかり西洋にかぶれて「外国のものは何もかもよい。外国の子供はまるまる太っているし、外国の女性は能力がある」挙げ句の果てには「八か国連合軍が北京を破壊したけれど、それは我々にとってよかった」「外国人は我々中国人の模範だ」と言う始末。馬伯楽はそんな父親の考え方に反対である。

こんなことでいいのか？ こんな子供が大きくなってなんの役に立つんだ？ 中華民族は日に日に深い穴に足を踏み入れているんだよ！ 中国がどの家も子供の時から、外国人を見たらまるで金を見るかのように目をぎらぎらさせて眺めるように教育したら、どうなるんだ。外国人はおまえに金をくれるわけじゃないんだよ。こんちくしょう、人民の汗と脂がみんな彼らに吸い尽くされちゃったというのに、それでもまだ尊敬するのかよ。<sup>15)</sup>

このように、口では父親の西洋崇拜を批判するのだが、行動においては西洋崇拜の価値観から抜け出せず、中国人の店では全てに疑いの眼差しを向け、どんなに安いものでも、まず値切る。しかし、外国人の店では頭から信用して、金に細かいそぶりなど少しも見せず、相手の言い値で支払う。無意識のうちに西洋人にはまったく頭が上がらないのである。

彼はまた、父親のように外国人がいいとは言わないが、しょっちゅう中国人を罵る。「こんちくしょうの中国人め！」不愉快な目に遭うたびに、この言葉が彼の口を衝いて出る。中国人でありながら中国人を罵るという矛盾をはらんだ罵言によって、作者は、主人公の鬱屈した心理状態をありありと描き出す。それは「俗人を超越していると思いつ込んでいる彼の強い自惚れを示すと同時に、どうしようもないコンプレックスをも示している」<sup>16)</sup>のである。

沙金成は、その意識構造の背景には、百年に亘る中華民族の歴史がある、と指摘する。

1840年の阿片戦争から1940年に蕭紅が『馬伯楽』を書くまで、まるまる100年間、中華民族は、帝国主義列強の政治的、軍事的、経済的、文化的侵略を受け続けてきた。腐敗した統治階級は手をこまねいて、中国の主権を帝国主義に差し出してしまった。(中略) こうして歴史的に培われた「恐洋症」は、次第に統治階級を始めとして、民族悲観主義的意識を形成していく。(中略) 馬伯楽の口癖である「こんちくしょうの中国人め！」は、旧社会に存在したこうした精神意識を反映しているのである。<sup>17)</sup>

馬伯楽父子に見られる西洋崇拜は自らを卑下する劣等意識の裏返しであり、馬伯楽の口癖である「こんちくしょうの中国人め！」は、彼の強い自惚れと劣等意識、その劣等意識に対する苛立ち、これらが蝸局を巻いている魂の奥の暗黒を象徴しているのである。

#### 四

馬伯楽の父親は敬虔なキリスト教信者らしく、熱心に聖書を読み、毎朝祈りを捧げる。家中至る所に聖像画が掛けられ、家族にも毎朝祈りを捧げることを求めた。見かけは模範的なキリ



スト教信者である。

ところが、使用人である車夫が今にも死にそうに苦しんでいるとき、父親は医者に診せようとしないうばかりか、「イエス様は狭いところはお嫌いだ」と言って屋内に入れることを拒む。また、五歳の孫、つまり馬伯楽の次男が乱暴者で女の子に怪我をさせたときも、相手の母親に謝るところか、「キリスト教を信仰しているか？」と尋ね、相手が「いいえ」と答えると、「道理で、あんたの子供は鼻血が出易いわけだ。それはキリスト教を信仰していないからだ。キリスト教を信仰しない人は災禍に遭いやすいんだよ」と言って、あくまでも孫の非を認めようとしないう。キリスト教を楯に、保身を図ろうとする、つまり、キリスト教という立派な衣を纏って、信仰とはほど遠い俗物のエゴイストという中身のごまかしを図るのである。

外見で中身を覆い隠す、そうしたごまかしを作者は次々と槍玉に挙げていくのだが、その中で、主人公がごまかしの尤もらしい理屈を考え出す場面がある。それは、湊江橋を渡るとき。

馬伯楽はトランクを持ち、さらに娘の雅格を抱いて湊江橋を渡らなければならなかった。だが、彼は力を使い果たし、もはやトランクか雅格のどちらかを手放さなければ持ちこたえられなくなる。トランクを手放せない理由はこうである。

よりによって、この二つはどちらも手放すわけにはいかない。トランクの中にはスーツが入っている。スーツを手放していいものか？ スーツは外観だ。人にとって中身はなくてもいいが、外見はないわけにはいかない。このご時世、誰があんたにどれだけの学問があるとか、どれだけの才能があるとか、といった中身を見るだろうか？ 中身は見えないが、外見は一目で見えるのだ。この世界、人々はりっぱな外見で悪い中身を覆い隠しているではないか？<sup>18)</sup>

結局、彼は土手から転落して、どちらも手放してしまうのであるが、りっぱな外見と悪い中身、つまり人を欺き自らも欺く欺瞞のからくりが非常にわかりやすく形象化されて、説得力のあるモノログとなっている。

これまで見てきてわかるように、馬伯楽の父親の最大の関心事は、いかにして金を使わないか、である。そんな父親から金を引き出すのは容易なことではない。馬伯楽は、父親から金を引き出せないときは、妻に借りる。妻はへそくりを彼に渡して、不機嫌な顔で言う。「男のくせに。外で金を工面できなくて、女の金を持っていくなんて」

そして、父親が金に細かいことに不満を抱く彼に、妻はびしゃりという。「……二、三十歳にもなるのに、口を開けば父さん、手を伸ばせばお金。お父さんがしっかり握っていなければ、あんたみたいな人は、将来妻を売ったり子供を質に入れたりするにちがいない。一日中、二本の手は、金を要求する以外にご飯を食べるだけ。ほかに能がないの？」

このように現実的でしっかり者の妻は、舅がキリスト教の信仰の厚い者に遺産を多く分け与えるというのを聞くと、俄然、朝の礼拝に励むようになる。父親にしろ、妻にしろ、キリスト教を信仰するのは、打算からであり、欲得ずくであるのが見え見えである。それで、馬伯楽は「この家は本当にひどい、みな金を見て生きている。道徳心がない、信仰心がない」と批判する。批判する彼自身、金を見て生きている人間そのものであるのだが。

学生時代には左翼運動に参加し、またゴリキーやゴゴリの作品にも親しんで、自分では進歩的で有為な青年であると思込んでいる馬伯楽であるが、金を稼ぐことは何をやっても失敗ばかり。家じゅうの期待を背に上海に出て書店を開いたときも、本は一冊も売れず、父親の金も使い果たしてすごすごと家に舞い戻る。家ではベッドは柔らかかいし、食事も時間通りにできたが、能なしの彼に対する家人の態度は冷たく、彼は毎日虐待されているように感じた。家での地位は若旦那というよりむしろ召使いに近かった。

「昔の人はうまいこと言ったものだ、人生は苦しいことが多くて楽しいことは少ない。金があれば、妻であり、子であり、父であり、兄である。金がなければのら犬にも劣る。人が生きるってことはこんなものだ。正義も真理もあったもんじゃない。すべて人を騙す言葉ではないか」と、彼は自分の無能を棚に上げ、親子の情さえも金次第だと呪詛する。その実、彼が父を父と認め、妻を妻と認めるのも、父が金を持っているからであり、妻から金を巻き上げることができるからなのだ。

## 五

盧溝橋事件（1937年7月7日）が発生するやいなや、馬伯楽は青島の家から上海に逃げた。人一倍警戒心が強くて、盧溝橋事件の重大性をいち早く察知したからである。

しかし、上海に着いてみると、上海の街は普段と変わらず賑やかで、危機意識のかけらも感じられない。当時、国民党が資金を稼ぐために「救国」の名を冠して航空くじを売り出していたのだが、そのくじ売り場にはとりわけ多くの人が群がって、目の色を変えてくじを選んでいく。馬伯楽はそんな能天気な人々に怒りを覚える。「日本人がまもなく攻めてくるというのに、まだ準備をしようとしなさい。ここでひたすら金儲けのことを考えている」「あんたたちは馬鹿じゃない。あんたたちはいい生活をしたいし、安定した生活をしたいんだ。みな集まって一生懸命に航空くじを買っている様を見ると、金儲けにどれほど切実であるかわかるよ。だけど、小日本〔日本人の蔑称〕がやってきたら、逃げ惑うことになるんだぞ。そのときになったら、連日泣きわめいて家族ばらばらになっちまうんだ。」

彼は、戦争が始まるから避難しなければいけない、と友人たちに説いて回る。しかし、誰にも相手にされない。一人で空回りするうちに、準備の時期は過ぎた、すぐに行動すべきだと考

え始めた。「さもないければ、そのときになったらどうする？ 人々がみな逃げる時になったらどうする？ 汽車や船は使えなくなる。戦争が始まったら、交通機関は使えない。兵を運ぶものは兵を運び、食料を運ぶものは食料を運ぶ。そのうえに難民を運ぶ余裕があるものかね？ 避難するなら早く避難しなければ、逃げ遅れてもいいのかね？ しかし、避難するには金が必要。」

彼は青島を離れるとき、青島は切迫した状況にあると思っていた。だから、彼は妻がすぐにも上海にやってくる、妻が来るときは必ず金を持って来る、とたかをくくっていた。ところが、妻はなかなか来ない。貯えは日に日に減少する。

「日本人はなぜまだ青島に攻めて来ないんだろう？ 青島に攻めて来ないと、奥さんは出て来ない、奥さんが来ないと金が来ない」「日本人は中国を攻めるには違いないが、こんなに遅いとは思いませんでした」「もし日本人が、もし……もし二十日以内に青島に攻めてこなければ、もう終わりだ。今は十元あるが、そのときになったら終わりだ」

戦争が始まれば妻が逃げてくる。妻が来たら金も来る。金に窮した馬伯楽は、あろうことか、戦争が一日でも早く始まることを、日本軍が一日でも早く攻撃してくることを、ひたすら望むようになった。

そして、ついに人々が続々と避難を始めた。

「いいぞ、避難だ」馬伯楽はうれしくなって思った。「これが、よくよく見ないでいられるかね？ こんな機会は多くはないんだ！ 今日見なければ明日にはもうなくなる」

彼はうれしくて、卵五個入りのチャーハンを食べた。

彼は痩せているけれども、大股で昂然と頭を挙げ、ときには口笛を吹きながら、上機嫌で街を闊歩した。彼は自信たっぷりだった。

そして、「八一三」前夜。

大砲がまもなく鳴り響くだろう。北四川路はしんと静まり返った。すべての家が空っぽになった。街路には人っ子一人いない。いつもなら街路いっぱい溢れた車がなくなった。全てが戦争を待っていた。全てが長い間待っていた。街路には引っ越しのため、紙が飛び散っている。市街地が空っぽになると、広野よりずっとがらーんとしている。広野は果てしなく広々としていて、何も遮るものがない。だが、市街地は真っ暗で、ひっそりとしており、建物がなにか怪物のようだった。がらーんとして広野よりもっと恐ろしい。<sup>19)</sup>

静まりかえった空っぽの市街地の印象を淡々と綴っているだけだが、すべてが息を潜めて戦争が始まるのを今か今かと待っている不気味な情景が、目の前に迫ってくる。

この夜、つまり8月12日の夜、蕭紅のもとに一人の日本人が訪ねてきた。鹿地亘の妻の池田

幸子である。池田は、13日未明に日本軍の上海攻撃が開始されることを知らせるために来たのだ。その夜、夫の蕭軍を別室に寝かせ、二人は一つのベッドに横になった。明け方、銃声らしき音が聞こえた。「池田、銃声じゃない?」「たぶん、そうだわ」。<sup>20)</sup> 攻撃される側の中国人と攻撃する側の日本人、蕭紅と池田は奇しくも一つのベッドで不安な一夜を明かし、「八一三」を迎えたのである。

さて、馬伯楽が待ちに待った日本軍の攻撃は開始された。しかし、それでも妻が来る気配はない。彼は自問する。金がなくて、避難できるのか?「金がなければ、また家に帰らなければならない。」家に帰ると考えたとなん、彼はもう考え続けることができなくなった。「あのような家にどうして帰れるものか。冷たくて、無情で、父親、母親、妻から末娘の雅格に至るまで、彼にいい顔をする者なんか一人もいない。」

馬伯楽は家賃が払えず、穴蔵のような家にさえ住み続けることができなくなって、友人の所に転がり込む。それでも、彼は家に帰りたくなかった。

## 六

妻が上海に来たのちも、馬伯楽はなかなか金を手にすることができない。妻の胸の内を計りかねた彼は次第に不安になってくる。

「まさか妻と三人の子供を、今後おれに養わせるというのではあるまいな?」

馬伯楽はそう考えると、恐怖を覚えた。

「それはできない、それはできない。」

もし彼に彼女たちを養わせようとしても、それは絶対にできないことだ。世界にあるはずのないことだ。断じて不可能なことだ。少しの可能性もないことだ。馬伯楽自身には絶対にできないことだった。<sup>21)</sup>

中本百合枝は「馬伯楽は幼児のままの状態で生き続けている、一人の幸せな男である」と言う。「普通の人間であれば対峙して解決していかなければならないような事であっても、彼はただ逃げるという行為で対処する。それだけが彼の持つ手段の全てなのである。彼はあらゆる責任を徹底的に回避する」。<sup>22)</sup>

妻の顔色を窺って、いつも逃げてばかりいる馬伯楽であるが、我が身の安全を確信したとき、安心して居直る。妻が自分に従わざるを得ない状況になったときである。

妻が彼にやかましく騒ぎ立てても、身を避けるか、或いは相手にしない。そうでなけれ

ば、彼は腹を立てて言った。

「おまえたち、青島に帰ればいい」

彼は、彼女たちが帰れないことをよく知っているので、とりわけ勇ましく怒鳴りつけた。<sup>23)</sup>

妻が泣いても、彼は気にも留めなかった。かわいそうとも恨めしいとも思わなかった。なんらの感覚もなしに彼女を軽視していた。相手が弱ければ弱いほどますますカサに掛かるのである。

このように、弱者に対しては本能の赴くままに身勝手に振る舞う馬伯楽であるが、手強い相手には、どう対処するのか？ 相手の言いなりになるのみである。しかし、それでは腹の虫が治まらないので、彼は自分を納得させるために言い訳を考える。逃げてきた南京も日本軍に空襲されるという。急いで避難しなければならぬのに、武漢に向かう船の切符はなかなか手に入らない。彼の足元を見たボーイが、切符を手に入れてやる見返りに船賃の二割を寄こせ、と言う。みすみす金を巻き上げられるのは腹立たしいと思うが、ボーイの要求を拒否することもできない。そこで、彼は考える。

それは当然のことだ。大混乱のときに、金儲けしないで、いつするのか？ 国難のときに、金儲けしないで、平和になってから、どこで金儲けするのか？ 人は生死存亡の瀬戸際では、相手が一と言えば一、二と言えば二だ。金が大事か、命が大事か？ 馬伯楽は、ボーイに二割やってもよしとしよう、と思った。<sup>24)</sup>

どれほど理不尽な目に遭っても、言い訳を考え出して、心の平衡を保とうとするのである。武漢滞在中、馬伯楽は妻の目を盗んで王家の令嬢と恋愛し、失恋する。その後、暗澹とした生活が六、七ヶ月続いた。しかし、とうとう光明がやってきた。なにが光明か？ 武漢もまた撤退しなければならなくなったからである。

馬伯楽は言った。「また逃げなくては」

すると、彼は元気になった。あたかも長征の大軍が出発する前夜のように、競馬場の馬が競馬場に出てきた時のように、あの満ち満ちた精神は遮ることができない。誰にも阻止できないのだ。

馬伯楽はこの知らせを聞くと、ぱっとベッドから跳び起き、「そのときが来たらどうするのだ？ 早く船の切符を買いに行こう」と言った。

妻が言う。「船の切符を買ってどこへ行くの？」

馬伯楽が言う。「みんなが行くところへだよ」

このとき、漢口じゅうの人々はみな重慶を思い描いていた。<sup>26)</sup>

武漢も決して安全とはいえなくなり、また逃げ出さなければならなくなった。その途端、それまで無気力で意気消沈していた馬伯楽は、俄然張り切り出すのである。

「馬伯楽にとっては逃げるということそのものが人生に於ける一つの目標になっている。彼は逃げようとしている時だけ精神の高揚を感じ、何処かに落ちていて安定すると鬱状態に陥るのだ」。<sup>26)</sup> 本来は生きるために逃げるのだが、馬伯楽においては、逃げることが目的と化し、逃げることによって生活が満たされ、逃げることによって彼は生命を吹き込まれるのである。こうして、馬伯楽一家が重慶を目指すであろうことを暗示して、「第二部第九章」は終わる。

## 七

葛浩文は『馬伯楽』を評して、「蕭紅は作中において、誰も口出しできなかった戦時文学と、あの自らを愛国作家と名乗る作家たちに、彼女の鋭い筆鋒を向けた」<sup>27)</sup> と言う。

日中戦争さなか、民族統一戦線が叫ばれ、文芸界においても、積極的に民族解放闘争を表現することが求められた。そうした抗戦ムードを高揚させ、人民の抗戦の決意を強化させることが求められた時代に、蕭紅は馬伯楽のような戦闘的でない臆病な人物を描いたのである。しかも、馬伯楽は社会的風潮にはとても敏感で、「中国の作家は現時点で積極的に抗日を進めなければならない」とか、「俺が作家だったら、抗日を指導しなければいけない。中国が抗日しないで、生まれ変われっこない」とか、「このご時世に日本をやっつけるのを書かなくて売れるかね？ それに、作家になりたいのなら、先頭に立って率いなくて認めてもらえるかね？」とか考える。いかにも見え見えの単純思考で、当時の風潮を風刺しているのは一目瞭然である。

戦時の緊迫した状況下において人々は平常心を失い、「愛国」「抗日」という言葉が強い呪縛力を発揮した時代に、蕭紅はその鋭い感覚で、上滑りの言葉を探る人間の危うさ、脆さ、軽薄さを感知していた。そして、馬伯楽の形象を通じて、いわゆる「愛国作家」たちを辛辣に皮肉った。蕭紅は異を唱えるのが憚られる空気の中で、敢えてその風潮を揶揄したのである。

陳潔儀は、『馬伯楽』の価値は「抗戦文芸」の外に立っているところにあると、指摘している。作品を通して「抗戦文芸」の創作様式に挑戦している意図が見て取れるという。

『馬伯楽』は「国家民族」的創作方向に対する揶揄に満ちている。故意に「抗戦文芸」とは反対の論調を唱えて、別の新しい作風を生み出している。「民族大義」とか「正気凛然」以外の日常生活の情景や些事を描いて、「抗戦述語」も揶揄的に用い、「英雄」以外の庶民の真実の生活情景を反映させた。(中略)

「抗戦文芸」陣営の内部から「抗戦文芸」の要求をぶちこわす、という試みを行った大胆さにおいて、蕭紅の一貫した創作の特色が現れている。<sup>28)</sup>

「抗戦文芸」の要求とは、国民の戦意高揚を図ることであり、そのためには、抗日に身を投じて闘う英雄的人物や英雄的行為を表現して、大衆を鼓舞しなければならない。しかし、蕭紅は馬伯樂という怯懦な人物を主人公に、当時の世相を風刺した。彼女は弱者の視点で戦争を見つめ、戦場ではなく後方で右往左往する人民に焦点を当てたのである。このような『馬伯樂』が、当時どのような評価を受けたのか、この点に関して、葛浩文はつぎのようにいう。

残念ながら、愛国文学と愛国作家に対する風刺の態度が原因で、戦時の文学評論家は『馬伯樂』に対して冷ややかな反応を示し、ほとんど誰も触れたがらなかった。それらの文学評論家たちはまったくどうしていいかわからなかった。というのは、蕭紅はともかく進歩的作家であり、公においても私においてもその路線は非常に正確であったからである。<sup>29)</sup>

中華民族が一丸となって抗戦を闘わなければならないときに、『馬伯樂』のような作品は戦闘意欲を削ぐものとして捉えられた。無論、そうした趨勢にあっても、中華民族の中にはびこる阿Q精神を洗い出して、克服すべき問題点を提示しようとする作家もいた。1938年に『華威先生』を発表した張天翼もその一人である。『華威先生』は、自己の存在を顕示するためにあらゆる会議や集会に出て指導者面をする空虚な人物を風刺した短編であるが、この作品が直ちに日本語に翻訳されて雑誌『改造』11月号に掲載されたことから、「数多い作品のなかから、日本人がわざわざこの作品を翻訳したのは、中国の抗日運動は大したことはないと宣伝するためだ」「この作品は味方を挫き、敵を利するものだ」等と物議をかもした。<sup>30)</sup>

『馬伯樂』も、ほぼこれと同じような評価を受けたのである。

## 八

蕭紅は友人の聶紺弩に、「意地でも小説を書いて見せる、『阿Q正伝』や『孔乙己』のようなものを！ しかも長さにおいて彼〔魯迅〕を超えるものを書く！」と語った。<sup>31)</sup> そのとき、彼女は中国人の「国民性」における問題点をえぐり出す作品を書こうと考えていたのである。

林賢治は次のように論じている。

『馬伯樂』は『阿Q正伝』の抗戦版といえる。魯迅は、阿Qを書いて中国人の寂寞の精神を描いた、という。ならば、蕭紅は「逃げる」の意識でもって国民性の低劣さを集約し、

魯迅の小説における、悲劇を喜劇化する手法をまねて、中国人の精神を描いたのである。<sup>32)</sup>

国民性の低劣さとして、蕭紅が最も問題にしたのは「人間的に不誠実ないい加減さ」であった。『馬伯楽』の中にも、その「不誠実ないい加減さ」を鮮やかに体现している人物が登場する。主人公一家が南京から武漢まで乗った船の船主である。

その船は、ひどくおんぼろで、南京と武漢の間を往復するたびに部品が欠け落ち、いつ沈没してもおかしくない。定員百人あまりというのに、今は四百人あまり乗せている。それでも船主は多くはない、と言う。多いときには五、六百人も乗せるんだ、と言う。

「こんな船、客を乗せるべきでない」「これは我々中国だからだ。もし外国だったら、こんな船はとっくに航行禁止になってるさ」「航行禁止のみならず、とっくに解体されているよ。このような船はいつ危険が起きるかわからない」「こんなぼろ船、老いぼれ水牛にも劣るといふのに、船賃を取るなんて……」「船賃がいらぬというのはいいけど、船がひっくり返ったら、命まで持って行かれるんだぞ」乗客の不満は今にも爆発しそうになった。

船主は、おとなしく聞いていたが、やがて演説を始める。

「……………諸君、感情にまかせて事に当たってはいけない。良心を持たなければいけない。人はいつだって良心を持つものだ。アラ探しをするなんて、それは売国奴のすることだ。全国上から下まで心をつにして敵と戦っているとき、どんな苦しみも恐れず、金のある者は金を出し、力のある者は力を出す。それこそわが偉大なる中華民族の精神なのであり、黄帝の子孫に値するというものだ。」<sup>33)</sup>

陳潔儀が指摘しているように、船主は「全国一丸となって抗日に当たる」とか「中華民族」とか「黄帝の子孫」とか「人としての良心」といった聞こえのいいことばを並べて、その醜い行為を覆い隠し、同時に、「売国奴」ということばを繰り返して使って、人々を叱責し脅すことによって自分が「公明正大」であることを強調するのである。<sup>34)</sup>

船主はさらに言う。

「諸君は避難するためなんだ。危険な所から安全な所へ逃げたいんだ。ところでわしはというと、南京と漢口の間を行ったり来たり。なんのためかね？ わしは諸君のためなんだよ！ 言い換えれば、我々の国家民族のためなんだ。でなきゃ、どうしてこの航行をやらなきゃいけないんだ？」(中略)「人は良心を持たなければいけない。でなきゃ、わしはなんのためにやってるんだ？ わしのこの小さな船に、もしそれ相当の荷物を載せて闇取引したら、今よりずっと気が利いているじゃないか！ だけど、そうしないだけのことさ。」



これが人間は良心を持たなければいけないってことさ。なにを良心と言うか？ 良心のある者は天に恥じず、地に恥じない。」<sup>35)</sup>

聴衆はすっかり感動してつぶやく。「中国は滅びるはずがない……」

問題の核心がすり替わっていくことに、乗客たちは気づいていなかった。もともと問題は、この船がのろいこと、この船がぼろいことにあった。ところが、船主は「のろい」と「ぼろい」には一言も触れず、逆に、この船の乗客全員が良心を持っていないかのように言う。すぐにもみんなまとめて「売国奴」になってしまいそうなのだ。船主にとっては「抗日」さえも商売の道具であり、金儲けのための名目にすぎない。

魯迅は「実」をとまなわないで、「ことば」（「名」）ばかりでごまかしていく方式こそ、これまでの中国人に連綿としてあった政治的、社会的、文化的欺瞞と見なした。<sup>36)</sup> まさに魯迅が指摘している「ことば」ばかりでごまかしていく方式を、蕭紅は、この船主の演説によって見事に形象化したのである。

「抗日」を叫びさえすれば正義である、と皆が感じていた時代、「抗日」の旗印には誰も逆らえない空気に覆われていた時代に、蕭紅はその「抗日」の看板の奥に潜む「人間的に不誠実ないい加減さ」を問題にし、立派な大義名分の裏にあるいかさまに近いすり替えを、戯画的な描写で表現したのである。そうした「人間的に不誠実ないい加減さ」を生み出した国民性の問題に関して、冉小平は次のように指摘している。

この作品において、我々は百年来の屈辱の歴史が一種の心理的蓄積となっていることを読み取る。新たな国難が出現して民族存亡の淵にある正念場において、働きもせず安逸に暮らすあの寄生虫の、意気地なしの、天性のふぬけ野郎の馬伯楽の西洋崇拜と西洋排斥、媚洋と恐洋の矛盾した心理が映し出しているのは、中国人の愚昧であり、怯懦であり、どうしようもなさである。（中略）我々はよく、「八年の抗戦」は外敵に立ち向かう民族の頑強さと忍耐力を示した、と言う。しかし、このような大民族が、小民族の侵入を撃退するのに八年もの年月を費やしたということについては、ほとんど考えようとしなない。<sup>37)</sup>

蕭紅は『馬伯楽』において、「抗日」の看板のもと、「人間的に不誠実ないい加減さ」が横行する庶民の日常を克明に描き出した。

「抗戦文学」を書くために作家は抗戦に参加しなければならない、という見解に対して、蕭紅は「後方であって警報を聞いて逃げ惑ったり、母親が戦場の息子を案じたりするのも戦時の生活だ」<sup>38)</sup>と語っている。彼女は、戦場で勇敢に戦う「英雄」ではなく、戦争によって最も苦しい生活を強いられる庶民の、混乱し、狼狽した生活を描き、抗戦中の人民の、不安で落ち着

かない心情を映し出した。同時に、国民性の問題点としてある「人間的に不誠実ないい加減さ」を、時代の風潮にひるむことなくえぐり出したのである。

### おわりに

『馬伯楽』が書かれてから半世紀以上経過した今日、それは我々になにを語りかけているのだろうか？

楊曉林は「馬伯楽は、取りも直さず我々自身である」「馬伯楽は、蕭紅の人間の弱点に対する深い考察を背負っている」<sup>39)</sup>と論じている。また、孫永良も「馬伯楽の中に我々自身の影がないだろうか？」と自問して、次のようにいう。

馬伯楽はもはや「青年知識分子」ではなく、甚だしくはもはや本当の意味で「人」ではない。彼は「人」としての精神、価値をとっくに失ってしまっている。彼はいかなる存在意義も持たない。家庭の中に位置がないばかりでなく、社会の座標においても彼自身には属する点がない。彼の「生」の快樂は、ただ「逃げる」過程においてのみわずかに感じることができる。逃げるのでなければ死んでいる。彼は生きていても死んでいる。(中略) この馬伯楽の「生もまた死である」の悲劇は、我々に恐怖を覚えさせる。それはこのような社会環境とこのような生存状態に対する恐怖であり、また自分自身の中にある馬伯楽の影を痛感して覚える恐怖でもある。『馬伯楽』の中で浮かび上がるのは、もはや風刺的可笑しさではなく、悲劇的情調である。『馬伯楽』は悲劇である。<sup>40)</sup>

『馬伯楽』に登場する人物たちの数々の愚昧な言動は、人間の心の奥に潜む低劣な欲望によって引き起こされたものであり、蕭紅は「時局の周縁に立って、周縁の人間の目で中国人の精神を見つめ、彼らの愚昧と精神の麻痺を解剖して、様々な病根を明示し、治療の注意を喚起しようとした」<sup>41)</sup>のである。

権力とは無縁の、社会の周縁に立つ女性は、既存の価値観の被害者であるが故に、既存の価値観の歪みを敏感に感じ取れる立場にある。蕭紅は周縁に立って人間の「愚昧」を見つめ続け、その鋭敏な感性で真と偽、実と虚を嗅ぎ分けて、作品を書き続けた。

「私の一生の最大の苦痛と不幸は、私が女であることによるもの」と自ら語っているように、蕭紅は女であるがゆえに蒙る不条理に苦しみ抜いた。そして、「女であるがゆえ」の不条理に屈することなく真正面から立ち向かったからこそ、時代の風潮を超越して、人間存在の本質に迫り得たのである。

『馬伯楽』は、そのような作者によって、人間の心の奥に潜む「低劣な欲望」や「愚昧」や

「精神的麻痺」が容赦なくめぐり出されていることによって、今なお、我々に根源的な問題を投げかけているのである。

## 注

- 1 聶紺弩「在西安」『新華日報』重慶1946年1月22日（『懷念蕭紅』黑龍江人民出版社1984年、32頁）。
- 2 川俣優「抗日戦争と蕭紅」『明治学院論叢』通号510、明治学院大学、1993年2月。
- 3 蕭軍「蕭紅書簡輯存注釈録」1978年（『蕭軍与蕭紅 蕭軍与王德芬』花山文艺出版社1993年、78頁）。
- 4 艾晓明「女性の洞察——論蕭紅的『馬伯樂』」『中国現代文学研究叢書刊』1997年4月。
- 5 「至黃崗」1940年6月24日（『蕭紅全集』1312頁）。
- 6 袁大頓「懷蕭紅」『星島日報』香港1948年1月22日（『懷念蕭紅』前掲書、78頁）。
- 7 冉小平「对国民性的思考和生命意義的探索——重讀蕭紅的『馬伯樂』」『三峡大学学报』第26卷第4期、2004年7月。
- 8 『馬伯樂』第二部第一章（『馬伯樂』黑龍江省人民出版社1981年9月、173頁）。
- 9 艾晓明前掲。
- 10 楊曉林「論“蕭紅体”小説的“別例”『馬伯樂』」チチハル大学学报2003年4月。
- 11 平石淑子「『馬伯樂』の世界」『蕭紅研究——その生涯と作品世界』汲古書院2008年2月29日、268頁。
- 12 尾坂徳司『蕭紅伝』燎原書店1983年1月、296頁。
- 13 「現時文芸活動与『七月』——座談会記録」1938年4月29日（『蕭紅全集』ハルビン出版社1998年10月、1319頁）。
- 14 沙金成「論蕭紅的『馬伯樂』」『蕭紅研究』北方論叢編輯部編、1983年。
- 15 『馬伯樂』第一部（前掲書9頁）。
- 16 沈巧瓊「論『馬伯樂』的女性視角」『廣東社会科学』2006年5月。
- 17 沙金成前掲。
- 18 『馬伯樂』第二部第三章（前掲書204頁）。
- 19 『馬伯樂』第一部（前掲書90頁）。
- 20 「記鹿地夫婦」『文芸陣地』第1卷第2期、武漢、1938年5月1日（『蕭紅全集』1216頁）。
- 21 『馬伯樂』第一部（前掲書135頁）。
- 22 中本百合枝「蕭紅の「部屋」——長編小説『馬伯樂』を中心にして——」『國學院雜誌』國學院大學出版部、1995年5月。
- 23 『馬伯樂』第二部第六章（前掲書258頁）。
- 24 『馬伯樂』第二部第四章（前掲書218頁）。
- 25 『馬伯樂』第二部第九章（前掲書289頁）。
- 26 中本前掲。

『馬伯樂』論

- 27 葛浩文 [Howard Goldblatt] 『蕭紅評伝』北方文芸出版社、ハルビン、1985年8月、136頁。
- 28 陳潔儀「論蕭紅『馬伯樂』对“抗戰文芸”的消解方式」『中国現代文学研究叢刊』1999年2月。
- 29 葛浩文前掲書136頁。
- 30 林林「談『華威先生』到日本」『救亡日報』桂林版1939年2月22日（『張天翼研究資料』中国社会科学出版社、北京、1982年8月）。
- 31 聶紺弩「回憶我和蕭紅的一次談話」『新文学史料』1981年第1期。
- 32 林賢治『漂泊者蕭紅』人民文学出版社、北京、2009年1月、273頁。
- 33 『馬伯樂』第二部第四章（前掲書229頁）。
- 34 陳潔儀前掲。
- 35 『馬伯樂』第二部第四章（前掲書234頁）。
- 36 片山智行『魯迅のリアリズム』三一書房、1985年4月15日、50頁。
- 37 冉小平前掲。
- 38 「抗戰以後の文芸活動動態和展望——座談会記録」1938年1月（『蕭紅全集』1318頁）。
- 39 楊曉林前掲。
- 40 孫永良「『馬伯樂』的悲劇底蘊」『呼蘭師專學報』1999年第2期。
- 41 陳進東「邊緣姿態的写作——析蕭紅的香港時期文学創作」『涪陵師範學院學報』第20卷第4期、2004年7月。

（やまもと・かずこ 国際言語学部准教授）

